献することが求められるようになって、男性の視点で「男女共同参画社会」づくりを見直すようになって来ました。渥美さんは企業の中で、瀬地山さんは大学で、その先駆的な役割を果たされています。小平でも推進の取組みに男性が参加するようになり、年々増えています。

## 馬車は2頭立てがいい 1頭では重すぎる

「家庭という馬車を1頭で引いていたのは高度成長期。今は、2頭立ての馬車がいい！」と、瀬地山さんは、おっしゃいます。「家事を夫が2時間、妻が2時間、平等に分担すれば、男は稼げる女性と結婚でき、2人の年収が2億円を超すこともあり得る。そこまでいかなくても、今抱えている重い荷物（負担）を下ろすことができる。妻子を養うために頑張っている男性も2頭立てなら楽になれる。」

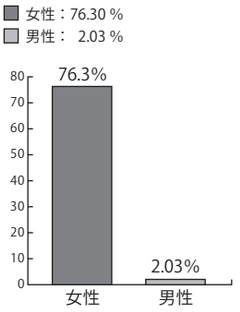
ただし、「みんなが働く社会は、みんなが家事、育児を共有する社会。家事、育児は手伝うものではない。家事、育児をしない男は得はしても家庭を破壊する。植林をしない林業者と同じ。」「男性が子育てするには働き方を変える必要がある。だから男のワークライフバランスの改善が必要」と、瀬地山さん。

男性が育児休暇を取るのは難しくて取得者がほとんどいない状況の中で、家族が大病して介護や看護しなければならなくなり、会社を止める男性が増えている。医療費削減のため病院が患者を長く入院させなくなって在宅医療が増えたからだが、こうした男性を支援する制度もあっていいのではないだろうか。

さらに、長い育児休暇でなく、短い出産休暇を男性にも取らせる制度はどうだろうか？瀬地山さんは、「子どもが生まれる時に父親が立ち会うというのはアメリカで常識。日本でも始まっている。親が亡くなったときに忌引きを認めているなら、子どが生まれた時も有給の休暇を認めるべき」と、おっしゃいます。少子化を止めるためにも必要では。

そんなことを考えると、男女共同参画社会づくりを推進するのは女性のためだけでなく、男性のためにも必要なことがわかってくる。「今の日本は世界でも、男女共同参画社会づくりで後進国。今ある男性社会に女性が入るのではなくて、女と男で新しい社会＝男女共同参画社会をつくるのです」と、瀬地山さん。

**育児休業取得率（平成25年）**
（厚生労働省「雇用機会均等基本調査」）




## 兼業主夫のメリット

清水　恭一（上水南町在住）（※）

私が兼業主夫と化して早、十数年が経とうしています。私はフルタイムでの仕事、すなわち専業サラリーマンとしての仕事を抱えながら5人の子育てもしてまいりました。三番目と五番目のときにそれぞれ7か月と9か月の育児休業も取得しています。

私のようなケースは類まれなものですからよく、「兼業主夫」のメリットなるものを尋ねられます。もちろんあらゆる物事にはメリットとデメリットがありますからデメリットの反対を答えればいいのですがそれは一言で「これとこれとこれ」というふうに答えられるものではありません。齢を重ねていくとなおさらそうです。

若い頃は若いホルモンが活発に出ていたということもあるのでしょう、なんでもできたような気がします。しかし、齢を重ねていくとできるはずのことができなくなる、あるいは意欲自体が削がれていく、そんなことを感じるような年齢を私も迎えました。ただそんな私の経験から言えることは家族というものは超打算的価値であり、ものすごい長い時間をかけてその価値は形成されていくということです。そして「崩れるのは一瞬」というような言われ方をされますが、私は長い時間をかけて積み上げてきたものはそう簡単には崩れないのではないかと思っています。

永遠に続くと思われた保育園生活も終了し、高校生になる上の子どもとの会話も少なくなってきました。時間に逆らうことはできません。しかし、その高校生になる子供が体調不良の時に自分を頼ってくれるような場面に出くわすと自分もまだまだ存在意義があるのだなとそんな気分になります。時間の経過とともに家族は次々と新しい問題に直面していくのだと思います。そういう問題に面と向かうことは正直、煩わしくもありますけれど、頼られる自分というのは何ものにも代えがたいものなのではないかと思います。

※12年前に「兼業主夫」マニュアルを出版。

## 子育て、介護、看護 家事、男でもできる！

働くことが女性にできない、と言う人はいませんが、子育てや介護、看護、家事が男性にできない、と思っている人は男性に限らず女性にもいます。「だから私が…」と家事をやっている女性を見かけます。それはそれでいいのですが、本当に男性にできないのでしょうか？

子育て、介護、看護、料理や掃除、洗濯などを仕事にしている男性がいます。義務教育で家庭科は男女が一緒に学びます。家庭から離れて一人で生活すれば、家事は自分でやるしかありません。やれないとしたら、親に甘えてやらなかった男性、結婚してもパートナーの女性に甘えてやらない男性かもしれません。

でも、男女共同参画社会は、子育て、介護、看護、料理や掃除、洗濯などを男女で共有してやっていく社会ですから、やらない訳にいきません。

瀬地山さんは、「働く女性をサポートして、子育てと両立させながら働く」という生き方をするために就職せず大学院に進学、30歳を過ぎて結婚を考える相手が見つかると、保育所は大学の中の保育所を利用して、送迎は自分でやると決めていたそうです。そのために博士の学位を取り、学術書を出版して定年まで在職できる職を確保。そして、パートナーが出産休暇を取ると一緒に渡米して子どもの出産に立ち会い、ハーバート大学で1年研修。

帰国してから念願の保育園送迎、自転車で通える場所に住まいを買って毎日送迎、夕食づくり、片づけ、夜中の授乳もしたそうです。4年後に2人目の子どもが生まれて、更に忙しくなったそうですが、「こんなに長い時間、子どもと過ごせて幸せ」といい、「子育てで男にできないことはない」と、言い切ります。

仕事と両立させながらの子育て、家事は容易なことではありませんが、それができたのは、自分の生き方を実現させる熱い思いもありますが、「日常生活で見る子どもの笑顔、子どもが抱きついてくる、子どもが初めて25メートル泳いだなど、子どもからたくさんの喜びをもらったから」と、瀬地山さん。

男女共同参画社会は、男性には仕事以外の喜びを、女性には家庭以外の喜びをもたらしてくれる社会、喜びが2倍も3倍も増える社会、といえるのではないでしょうか？

## 残念な夫にならないために

NPO法人 tadaima! 代表理事 三木 智有（※）

今、話題の「残念な夫」というドラマをご存知ですか？ 玉木宏演じる自称イクメン夫が、家事に子育てに空回りしまくるドラマです。（笑）

このドラマの第一話を見てみたのですが、最後まで見ることができずに途中でやめてしまいました。コミカルで面白いんだけど、何だか見ていてイライラしてしまったんです。

（結局最後まで見ましたが…）

ドラマを見てイライラするなんてことは普段はないので、自分でも不思議に思い、このイライラの原因はどこからきているのだろうかと考えたところ、もはや喜劇と化している夫の言動が意外とリアルに起こっていることなんじゃないか!?と思ったのです。正直、その時はヒヤリとしました。果たしてこの状況を笑って見ていていいのか？

世の中では、家事の話しにしろ、育児の話しにしろ、「夫はでかい息子だ」みたいな論調がいまだにあります。

確かに、一人で子どもの面倒が見られない、ご飯だってインスタントしかつくれない、洗濯物は適当に全部洗濯機に放り込んでおしまい、別に掃除はやらなくても死なないし、ってことでやらない。悲しいですが、そういう夫がたくさんいるのは事実です。ですが、そもそも家事や育児というのは妻だけの仕事ではないと思います。働いて稼ぐのも、夫だけの仕事ではありません。〝両方とも2人（家族）の仕事なのです。

わが家も娘が産まれて2か月になりますが、育児と仕事に携わりながら改めて思うのは、自分が働くことができるのは娘の面倒をみてくれる人（妻）がいるからなんだなぁということ。もし妻が何かの理由でいなくなったとして、娘の面倒をみるのは僕なんです。だからといって働かないわけにはいきません。そんな難しい状況に置かれずに済むのは、家族という協力関係があるからにほかなりません。夫は「でかい息子」ではなく「頼れるパートナー」として、一緒に家庭を担っていくという「覚悟」や「決意」が大いに必要なのではないかと感じました。

※昨年9月に「家事シェア白書」を出版。

東京都は、ドラマとタイアップして
男性の育児参加を進めている。